「葬られたのはどんな人物？宮山遺跡のお墓」

◇弥生時代のお墓事情

縄文時代は直接地面に穴を掘って遺体を葬る土坑墓が一般的で、住居の近くに共同墓地を作っていました。

ところが、弥生時代になると事情が一変します。中国大陸や朝鮮半島から様々な墓のスタイルが伝わり、土坑墓に加えて、木製の板を使った木棺墓や石の板の石棺墓、大人がすっぽり入る大きな土器を使った甕棺墓など地域によって様々な種類の墓が造られました（図1）。また人口が増えたことで集落内に収まらない規模の墓域が必要になり、集落と墓地は分けて作られました。

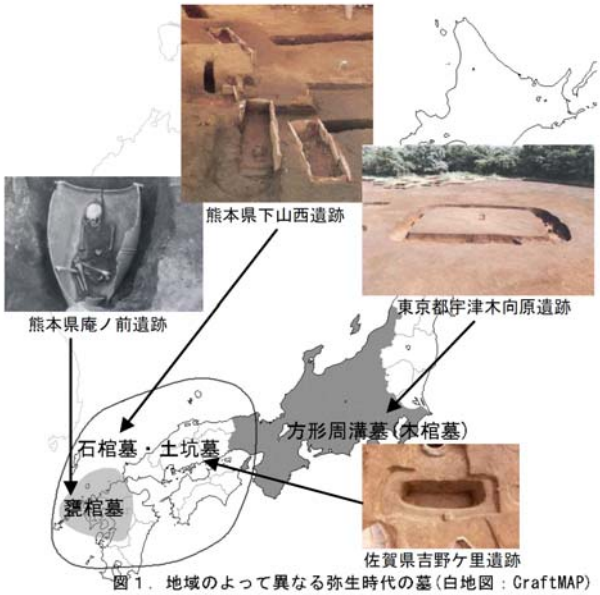


図1．地域によって異なる弥生時代の墓（白地図：CraftMAP）

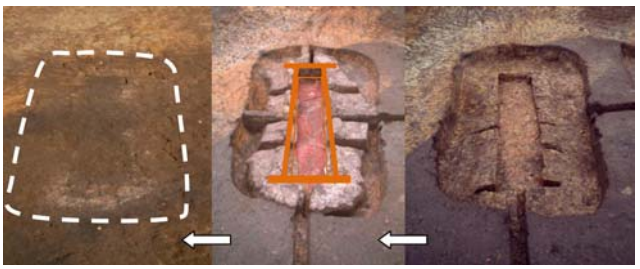
弥生時代は集落内の身分差によって墓の作り方が異なり、特に集落を治めた人物の「王墓」には青銅製の武器や鏡、美しい石製のアクセサリーなどが供えられて一般の墓とは区別され、土盛りした墳丘の中心に遺体を納めたり、あるいは周溝を巡らせたりと豪華な墓を造っていました。このような特別な墓で規模が大きいものを「弥生墳丘墓」と呼び、後の古墳の原形になったと思われます。

◇宮山に葬られた人

今回の調査では、特別な人物を葬ったと思われる墓の跡を発見しました（写真1）。詳しく調査したところ、長軸を南北にとって長さ約3m・幅約1.7mの長方形の穴を掘り、その中に屍床（※）を設け貴重な赤色顔料ベンガラを4kgも敷き詰めていました。さらに屍床の周囲を白い粘土で覆っており、非常に丁寧に造られた墓です。残念なことに、内部から人骨や時代が判るような遺物が見つかりませんでしたが、弥生時代後期の住居を壊して造られていることから弥生時代の終わり頃から古墳時代のもの（約1700年前）と考えられます。出土状況から木製の板を組み合わせた木棺墓の可能性がありますが、棺の部分は腐ったためか残っていませんでした。当時、棺となる木の板を作るのは非常に高度な技術でした。伐採した木を寸法どおりに切り出し、まっすぐで平らな板は鉄の道具でないとできません。宮山遺跡では木材を加工する道具でヤリガンナという鉄製品が出土しました。このような道具を使って、宮山の人々は木棺を作ったのでしょう。

実は同じような時代の墓跡が下山西遺跡と狩尾・湯ノ口遺跡（宮山遺跡通信No.2参照）から発見されています。宮山1号墓と同様に大量のベンガラを敷き詰めた特別な人物のためのものです。しかし宮山1号墓と違って、両遺跡は板状の石材を組み合わせた石棺墓でした。

写真1　宮山遺跡の墓跡（1号墓）


1.長方形の穴を掘り、屍床を作る。
2.木製の棺を白粘土で覆い、屍床にベンガラをまく。
3.遺体を納めてふたをし、全体を土で埋める。

これまで阿蘇谷では石棺墓が多く確認されてきましたが、同じ時期の木棺墓はありませんでした。昭和46年の阿蘇西小学校グラウンド造成時に埋まっていた石棺墓の石材が出土したと証言が伝わっており、宮山遺跡も本来は石棺墓が主体だったかもしれません。ということは、木棺墓の宮山1号墓は非常に珍しい存在になります。墓の形は葬られる人物の文化的背景や風習・信仰を表現します。石棺墓が当時の阿蘇谷の風習であるならば、1号墓は異なる風習に基づいて造られた墓です。つまり阿蘇とは異なる風習の地域から来た人物が宮山に葬られたことになります。

神話によれば、神武天皇より大和から遣わされた健磐龍命は二重峠を蹴破るのを断念した後、今度は立野を蹴破って阿蘇谷の開拓を始めたと伝えられています。神話の舞台となった地域に近い宮山の集落に、従来の阿蘇谷とは異なる風習をもった人物が眠っていたのは何かの偶然でしょうか・・・

※屍床・・・棺内の遺体を納める部分